

騎 手 の 服 の 呼 び 方 一 つ に も 、 何 や ら 格 調 高 さ	服 は racing colours と か racing silks な ど と 言 う そ う だ 。	あ る 。 文 化 と い っ て も 過 言 で は な い 。 騎 手 の	「 貴 族 の 遊 び 」 と い わ れ 、 彼 ら の 社 交 の 場 で	り と い わ れ る 。 発 祥 の 地 イ ギ リ ス で の 競 馬 は	る た め に 、 騎 手 に 目 立 つ 服 を 着 せ た の が 始 ま	こ と を 指 す 。 馬 主 が 自 分 の 馬 を 見 分 け 易 く す	勝 負 服 と は 本 来 、 競 馬 の 騎 手 が 着 る 上 着 の	て く れ る 相 棒 と 言 い た い 。	「 勝 負 靴 」 で は な い 。 私 を 鼓 舞 し 、 寄 り 添 っ	。 踏 み 出 す 一 歩 が 軽 や か に な る 。 で も こ れ は	ち は リ セ ッ ト さ れ る 。 ま る で し な や か な 鎧 だ	眠 か ろ う と 、 疲 れ が 残 っ て い よ う と 私 の 気 持	靴 と 一 体 化 す る と き 、 前 夜 が 遅 く て ど ん な に	ひ も を 結 ぶ 。 甲 が き ゅ っ と 締 め ら れ 足 全 体 が	も の よ う に 細 い 、 お 気 に 入 り の ス ニ ー カ ー の	め る こ と に 匹 敵 す る だ ろ う か 。 紳 士 靴 の 丸 ひ	だ 。 戦 国 武 将 な ら 兜 の 紐 か 、 は た ま た 禪 を 締	っ た 。 出 勤 前 に ス ニ ー カ ー の ひ も を 結 ぶ こ と	あ あ 、 そ う だ 。 私 に は 毎 朝 一 つ の 儀 式 が あ
--	---	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	---

を感じるのは私だけだろうか。色とりどりの
光沢を放つ服をまとう騎手、躍動する馬群、
それを見つめる大きな帽子の婦人たち。そん
ないギリス競馬の歴史を思えば racing silks は「勝
負服」にはならないだろう。英語で勝負服に
当たる言葉も見つけられなかった。かたや日
本語の「勝負服」は、ビジネスからプライベ
ートまで様々なシーンで、ここぞという時に
着る服を意味するように変化した。そこには
バブル期の名残とともに、日本人特有の気質
―他人との比較を基準とする価値観や、常に
人に良く見られたいと思っっている―が、私に
は感じられてならない。また勝負服を着るの
は、それがどんな機会であつても、何回あつ
たとしても、人生という長い線上の「点」一
時のこととして捉えられているのが普通だと
思う。しかし、今この瞬間に私が向かい合
い、人生の一番と感じているのは、点ではな
い現在の連続、「線」なのだ。私の勝負の行
方がいつ判るのか、今の私にはわからない。

